

ピペリデン投与における統合失調症患者の認知機能への影響について

田中謙太郎 高田景一郎 永井 宏
西村 良二

福岡大学医学部精神医学教室

要旨：近年，新規抗精神病薬が開発され，薬物療法は進歩したが，錐体外路症状が出現し，抗パーキンソン薬であるピペリデンが処方されていることが多い。しかし，ピペリデンが認知機能に影響を及ぼすという報告がある。そこで，ピペリデンが統合失調症患者の社会復帰に関係あるとされている認知機能に与える影響について，神経心理学的，及び神経生理学的に評価した。対象と方法：福岡大学病院精神神経科外来において，リスペリドンを少なくとも服用している男性統合失調症患者 8 名に，ピペリデンを 4 mg/day を 2 週間服用させ，2 週間後に陽性陰性症状評価尺度 (PANSS)，GAF，錐体外路症状評価尺度 (Simpson & Angus) Trail making test (TMT)，Wisconsin Card Sorting Test (WCST)，Prepulse Inhibition (PPI) の評価を行った。結果：PANSS，GAF は有意な変化は認めなかったが，Simpson & Angus は有意に改善していた。TMT は，有意な変化は認めなかったが，WCST は，カテゴリー達成数において改善傾向を認めた。PPI はプレパルスとパルスの間隔が 120ms のときに増強する傾向を認めた。まとめ：ピペリデンは統合失調症患者の社会復帰を推し進めるに当たって，精神症状に影響を及ぼさず，錐体外路症状を改善させ，認知機能には影響を及ぼさない可能性が示された。

キーワード：統合失調症，認知機能，Trail making test，Wisconsin Card Sorting Test，Pulse Inhibition